様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月　７日現在

機関番号：13901
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2007～2010
課題番号：19320034
研究課題名（和文）
日本古典籍の記述的書誌データベースの公開と活用の研究
研究課題名（英文）
Research regarding the public access and use of the descriptive bibliography database of Classical Japanese books
研究代表者：塩村　耕（SHIOMURA　Koh）
名古屋大学・文学研究科・教授
研究者番号：80178855

研究成果の概要（和文）：日本で最重要の文化資産は古典籍であるが、どのような内容の書物が存在するのか、把握し難い状況にある。そこで、記述的な書誌 DB を提唱し、そのモデルケースとして、古典籍の宝庫として知られる西尾市岩瀬文庫について悉皆調査と DB 作成を行い、2010 年 11 月に公開を開始することが出来た。最大かつ最も詳細な書誌 DB で、これにより資料間にある先人未知の連関が判明し、将来にわたり、文庫の活用につながるものと期待される。

研究成果の概要（英文）：One of the most important cultural properties in Japan is classical manuscripts and printed texts.　However, at this moment in time, the contents of extant texts are difficult to grasp.　Therefore, I have advocated the construction of descriptive bibliographic databases.　To serve as a model, I have supervised the comprehensive inventory of the treasury of classical manuscripts and printed texts owned by Nishio City Iwase Bunko Library and following the inventory, created a database which opened in November, 2010.　The largest and most detailed of its kind, the Iwase Bunko database identifies relationships between materials which have never before been linked.　We expect the utilization of this database to greatly enable future research of materials within the library.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2008 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
総　計	6,700,000	2,010,000	8,710,000

研究代表者の専門分野：日本近世文学
科研費の分科・細目：日本文学・日本文学
キーワード：国文学・情報図書館学・書誌学

１．研究開始当初の背景

岩瀬文庫で出会った数多くの書物の中で、各別印象深いものに『八幡書庫記』という資料がある。西尾近郊、寺津八幡宮の神職で国学者、渡辺政香（1776～1840）の自筆写本で、政香が同神社に文庫を付設する際の志が、達意の漢文で記されている。その末尾は次の文章で締めくくられる。「凡そ物は衆と与に楽しむに如かず。藉し人の神庫の図書を閲せんことを請ふもの有らば、輙ち其の謂ふ所に随ひて少しも拒まざらん。乃ち之と倶に窺ひ、日新の聖域に躋らん」。この一文には、古今東西をとわず、全ての文庫・図書館の本来もつべき理念が凝縮されている。

また、岩瀬文庫にある、三河人の揮毫した短冊を集めた帖の中に、次のような渡辺政香

自筆の和歌短冊が張り込まれていた。

書（ふみ）

言だまのさきはふ国のふることも

ふみなかりせばいかでつたへん　政香

これまた書物のもつ文明史的意義が端的に歌い上げられた名歌である。以上により政香という人が書物について各別に洞察を深めていた人であったことがわかる。

このような資料が岩瀬文庫に所蔵されていることは偶然ではない。文庫を創設した岩瀬弥助（1867～1930）は、郷土の先人である渡辺政香の志を、時代を隔てて継承し、より大きな規模で発展させたことがわかっている。弥助自身は文庫開設の意図について多くを語らず、ただ文庫開館を記念して地元の伊文神社に献納建立した石灯籠の胴石に、わずか 80 文字の漢文を残すに過ぎない。その冒頭部には、「余嘗て、一小文庫を設立し、之を身にも人にも施し、且つ之を不朽に伝へんと欲す」とある。集めた書籍を、自身のみならず、一般社会に公開提供することにより、自らの死後も末永く、書籍を後世に伝えようというものである。この弥助の意図は見事に功を奏し、弥助の没後、戦中戦後という最も困難な時期をも市民の支援を得てくぐり抜け、文庫は今年満 103 歳を迎える。

以上は私の親しく知るわずかな一例に過ぎない。が、これと同じような古人の営みが日本全国各地で行われたはずで、その結果大量の古典籍が今に残されている。

ところが、どのような書物が残されているかについては、現状では基本的に簡略な目録情報しかなく、その全貌は把握しがたい状況にある。せっかく古人の配慮によって残された書物の多くが、活用されることなく死蔵されていると言っても過言ではない。

２．研究の目的

上記のような状況は、文化国家と呼ぶには不相応で、国際的に見ても文化財の管理者として責任を果たしているとは言い難い。日本と文化状況の類似する韓国の場合、たとえば、韓国国立中央図書館の提供する韓国古典籍総合目録システム

http://www.nl.go.kr/korcis/

や、韓国歴史情報システム

http://www.koreanhistory.or.kr/

など、優れた古典籍 DB サイトが備わっている。古典籍をめぐる日本の文化基盤の立ち後れは否めないだろう。

この問題を解消するためには、従来型の目録をいくら整備しても不十分である。〈記述的〉書誌 DB こそが、新たな時代の文化基盤として必要で、PC をはじめとする電子機器やインターネット環境の進歩がその実現を可能とした。

〈記述的〉書誌 DB では、まず、①序跋や奥書、書写識語、版本の刊記など成立に関する情報、②書物の形態や素材、書写や印刷の状況など書物のモノとしての側面に関する情報、③かつてその書物に触れた人々の識語や旧蔵印など享受に関する情報が、まず盛り込まれる。それのみならず、④内容についても踏み込んで記述され、時には目次情報や内容の一部が摘記される。

このような DB が充実すると、人名をはじめとする文字列の検索を行うことにより、資料間にある連関が浮かび上がり、また古人の営みの多くが判明するはずである。それらはさまざまな研究の方面に、先人未知の新領域をもたらすだろう。そして、所望の事柄が記述された資料が直ちに判明し、古典籍に新たな価値が付与され、社会に裨益するものと期待される。

３．研究の方法

岩瀬文庫で行っている書誌調査とは、どういうことをする仕事なのか。たとえば、名所の風景を描いた享保 17 年（1732）刊の『和朝名勝画図』という地味な絵本がある。著者の漱石子は『国書人名辞典』を見ると、藤井氏、京の人、とあるのみで、伝記がよくわからない。こういうのは何とも口惜しい。著者にたどりつくヒントは、奥書の作者肩書で、「承議郎金吾校尉」とある。これは正六位下・右衛門尉の唐名である。そこで『地下家伝』をひもとき、藤井姓の者を捜索すると、藤井重好という人に行き当たる。時に正六位下・大舎人大允兼右衛門少尉でぴったり一致する。

次に「藤井重好」で「古典籍総合目録」DB を探ると、享保 20 年刊『築山庭造伝』の画人であることがわかる。その本も岩瀬に所蔵され（岩瀬文庫ではなぜかこういう体験をすることが多い）、見ると見返に同じように「承議郎金吾校尉藤井宿祢重好画図」とあり、画風も一致する。これで、今までばらばらの存在だった二つの絵本も繋がり、まずは当面の疑問は解決され、さらなる関連資料の出現が今後待たれることとなる。

あるいはまた最近の例では、『心閑園の記』という文化 2 年（1805）に成った自筆写本がある（孤本）。筆者は翠葵軒なる人物で伴蒿蹊門人の女流歌人らしいが、伝不詳（つまり国書人名辞典などに記載がない）。国書総目録に、翠葵軒柳子の『まつむしの説』なる著書が見えるものの、「＊本草書目による」とのみあって伝本の所在が記されない。が、念のため、われわれの岩瀬文庫 DB を探ると、その『まつむしの説』は不思議なことに岩瀬にちゃんとあって（合綴本の陰に隠れていた）、見るとやはり伴蒿蹊の門人による著述で、同一人であった。さらに蒿蹊編『閑田文草』巻 5 には、田中氏柳子の和文が載り、姓

もわかる。
『心閑園の記』は、筆者が幼い頃を過ごした、上賀茂辺にある心閑園という別荘について記した歌入りの和文で、今は人手に渡ってしまった同園からの美しい眺望や四季折々の景物が、心を込めて懐古描写されている。本文によれば、筆者の祖母の祖父である「加賀守うし」が後西天皇の各別の愛顧を受け、その学問所の殿舎を下賜されて営んだ別荘という興味深い話が語られる。そこでまた『地下家伝』を繰ると、上賀茂社家で花町宮（後の後西帝）の諸大夫や院非蔵人、上北面を務めた藤木成直がこれに該当する。ざっと、これらのようなことを書誌 DB には記述するわけである。
以上のように、その資料からわかることだけを禁欲的に記すのではなく、少し手間をかけて、手近の資料でわかる限りの関連づけを加えた書誌記述を、可能な限り行う。殊にこの数年はさまざまな古典籍に関する DB が公開され、充実を深めつつある。われわれが頻繁に参照させてもらっているサイトを挙げると、早稲田大の古典籍 DB、日本古典資料調査 DB（書誌カード DB）をはじめとする国文学研究資料館の種々の DB、東京大霞亭文庫や大阪市大森文庫、京都大貴重書、京都府立総合資料館などの古典籍画像 DB、などで、もちろん他文庫所蔵本の写真を取り寄せる場合もある。それらを通して別本と比較することにより、さまざまな重要情報が判明し、それらをも DB にどんどん書き込んでゆく。
ところで、そもそも書誌学とは何か。まず、書物の研究とは本質的に比較研究である。なぜならば、文書類と違い、書物は複製されるものであって、その間にある微妙な差異にこそ、書物を解く重要なカギがあるからである。また、類似する書物、関連する書物との比較も、同じように重要な意味がある。ところがその一方で、書物は現存数があまりに多く、しばしば分量も大きく、おまけに移動したがる本性があるために、あちこちに散在するのが常で、これらのことが比較を難しくしている。思うに、書誌学とは、そういった比較研究の手がかりとなるよう、書物をいかに記述すべきか、追究する学問ではないだろうか。したがって、書誌学者の多くの労力は、共有するコードを確立することに費やされる筈である。
以上のような書誌学の成果を反映させて、比較研究の手がかりを、大規模かつ簡便に社会に提供する道具が〈記述的〉書誌 DB なのである。

４．研究成果
まず、西尾市岩瀬文庫所蔵の古典籍について〈記述的〉書誌 DB を整備し、平成 22 年 11 月に公開を開始した。
http://www.city.nishio.aichi.jp/nishio/kaforuda/40iwase/index.html
全体の約 9 割の 1 万 6 千タイトルを収めており、日本で最大かつ最も詳細な書誌 DB となっている。その外に名古屋大学附属図書館の古典籍についても同様の整備を行い、同図書館後藤文庫については古筆切資料について、書誌（極め札や筆跡類似資料の所在情報を含む）、画像、全文テキストを備えた統合的 DB を作成公開した。
http://libst1.nul.nagoya-u.ac.jp/wakan/index.html
（古筆切資料については、上記サイトの「和古書検索」の窓に「後藤古筆」と入れて検索していただきたい。古筆切資料が列挙されるので、各書誌データの「電子化資料」のリンクをクリックすると、画像と本文翻刻が掲示される。）
岩瀬文庫の DB は公開後、いまだ半年足らずで、本 DB に対する利用者の反響について、詳細な検討は今後に期したい。が、DB を通して未知の関連資料を知ったとのことで、閲覧利用や複写依頼の件数は従来よりも確実に増加している。望外の喜びであったのは、利用者より得た情報提供である。書誌記述の誤りの指摘のほかに、資料筆者の子孫の方より、筆者の伝記に関する教示をいただいた。それは外の手段を通しては得難い貴重な情報で、今後このような形による DB の質的改善が期待される。
書誌 DB はいちど作り上げると、未来にわたり情報を発信し続け、書物にとって最もまずい状態である死蔵を防ぐことが出来る。そして、不断に補訂を加えることによって、質量ともに成長し続けることが出来、従来型の紙媒体による目録にない大きな長所となっている。
いっぽう、短所としては作成の際の作業効率が悪いことが挙げられる。これまでの経験では、1 日に 5～10 点の処理が限度であった。また一定レベルの書誌記述の質を保つためには、共同作業も難しく、要するに作業効率の悪さは作業日数を増やすことによって補うほかはない。
そのような大きな難点はあるものの、今後各地の文庫・図書館で類似の〈記述的〉書誌 DB が整備されることがどうしても必要である。整備が進めば進むほど、資料の間にある、従来は見えなかった連関の判明が、等比級数的に増えるはずである。岩瀬文庫と名古屋大学附属図書館でのわれわれの試みはささやかな事例に過ぎない。が、それを通して従来とは質の異なる発見があるはずで、それを体験した利用者の中から、同様の DB 作成を始めてくれる同志が出現してくれるであろうと確信している。

最後にわれわれの長年の取り組みを通して感じた、書誌 DB の今後の課題について記しておきたい。

一は筆跡データの重要性である。写本のうちの多くのものには筆写者の名前が記されていない。が、「誰が」その書物を写したのかは、書物そのものの性格に関わる最重要の情報である。

岩瀬文庫には幸い多くの名家自筆本が含まれている。そして、その所在については〈記述的〉書誌 DB により瞬時に判明する。今後、その筆跡サンプルの画像データを書誌データに添付することにより、筆跡の DB として有用なものを提供することが出来る。

ただ遺憾であるのは、岩瀬文庫の中でも、とりわけ大きな価値のある蔵書群である公家の柳原家の旧蔵本について、調査の初期においては筆写者の筆跡について知見が少なかったために、DB に書写者について言及していないことだ。これらは上記のような DB を整備することにより、将来的にデータの見直しをはかる必要がある。

版本（整版本）についても、版下筆者の筆跡を反映しているため、写本に準じた扱いが可能である。特に序文や跋文は名家の自筆を模刻することが多く、筆跡資料の重要な資源となるであろう。

今回の調査では、たとえば従来作者の伝が不詳であった、貞享 3 年刊『諸藝小鏡』が、版下の筆跡より坂内山雲子の筆跡であることに気づき、同人の著述であることが判明した。さらに天和貞享期の重要な好色本である『好色袖鑑』『好色訓蒙図彙』『好色貝合』『人倫糸屑』の連作も、その筆跡より山雲子の著述とわかった。今後筆跡判定の基準となる DB の充実により、同様の発見が得られる可能性がある。

二はフルテキスト DB の必要性である。前述したような、多くの古典籍の死蔵的状態と相俟って、古書の中にある重要な語彙の用例が補足されぬままに眠っている。たとえば、岩瀬文庫にあった『地方要集録』という地方（農村支配）業務の覚書写本の中に、次のような説明があった。「森と言は、寺社等之境内等に木を植立置、茂りて材木薪にも伐取らず立置候を言。林と言は、何方に而も山川原か原等に木を植立置候て、材木薪にも伐り候、木立茂りたるを林と言也」。「モリ」と「ハヤシ」の区別について、明確に記している。現代の国語辞典にこの用例はもとより、類似の記述は一切ない。おそらく同様の事例は数多いことと思われる。

夢話に属すると思われるかもしれないが、あらゆる分野の古典籍についてフルテキストデータが集められたならば、ほぼ完全な国語辞典が出現する。実現は将来にあるとしても、そろそろ準備を始める必要がある。

まずは、他では得難い稀少資料について、フルテキストデータをこしらえ、書誌 DB に添付することによって、その先鞭を付けることが出来るように思われる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 17 件）

①塩村耕「古書に見る江戸期の子ども観」、『日本古書通信』970 号、8-9P、2010、査読無

②塩村耕「山本亡羊読書室の旧蔵書」、『日本古書通信』977 号、46P、2010、査読無

③塩村耕「後藤文庫の古筆切データベースについて」、『館燈　名古屋大学附属図書館報』173 号、1-3P、2009、査読無

④塩村耕「岩瀬文庫に眠る蒹葭堂資料」、『蒹葭堂だより』第 9 号、1-2P、2009、査読無

⑤塩村耕「西鶴同時代の隠者作家　山雲子の新たに判明した著述」、『日本古書通信』963 号、4-7P、2009、査読無

⑥塩村耕「正月の古書たち」、『日本古書通信』、74 巻 1 号、2-4P、2009、査読無

⑦榊原千鶴「明治二十四年の『からすまる帖』―福羽美静にみる戦略としての近代女性教育―」、『名古屋大学文学部研究論集』、55 巻、1-15P、2009、査読無

⑧塩村耕「岩瀬文庫と〈本の町〉」、『東海地区大学図書館協議会誌』、53 号、39-47P、2008、査読無

⑨塩村耕「岩瀬弥助と岩瀬文庫」、『日本古書通信』、73 巻 5 号、5-7P、2008、査読無

⑩高橋亨「『狭衣物語』の絵画資料と歌」、『広田留奈良絵本・絵巻』（三弥井書店刊、単行本）、49-76P、2008、査読無

⑪高橋亨「間（インター）テクストとしての古注釈と『源氏物語研究』」、『平安文学の古　注釈と受容』1、35-39P、2008、査読無

⑫塩村耕「西鶴、一晶、芭蕉」、『元禄俳人縫賀一晶と歩く東海道五十三次』（単行本）6-13P、2008、査読無

⑬阿部泰郎「説話・伝承の場としての真宗寺院開帳法会―善徳寺虫干法会における儀礼とテキスト―」、『説話・伝承の脱領域』（単行本）、307-321P、2008、査読無

⑭阿部泰郎「『とはずがたり』―引き裂かれる中世と女人―」、『中世文学の回廊』（単行本）、347-360P、2008、査読無

⑮塩村　耕「国語国文学期の展望　近世小説（前期）」、『国語と国文』5 月特集号、120-126P、2007、査読無

⑯塩村　耕「書評・梅原章太郎著『蕉風付合論』」、東奥日報（新聞）、2007、査読無

⑰榊原千鶴「明治期の〈常磐〉と〈静〉」、斎宮歴史博物館特別展図録『ヒーロー伝説―描き継がれる義経―』、巻無、54-56P、2007、査読無

〔学会発表〕（計２件）
①塩村耕「岩瀬文庫で教えられたこと」、慶応大学斯道文庫50周年記念シンポジウム、2010.12.4、慶応大学斯道文庫
②高橋亨「江戸前期の物語絵とその詞書筆者たち」、奈良絵本・絵巻国際会議ワシントン大会、2009.3.27、フリア美術館

〔図書〕（計６件）
①阿部泰郎編、名古屋大学出版会、『日本における宗教テクストの諸位相と統辞法「テクスト布置の解釈学的研究と教育」第４回国際研究集会報告書』、2008、360P
②塩村耕、家の光協会、『こんな本があった！江戸珍奇本の世界』、2007、127P
③高橋亨、名古屋大学出版会、『源氏物語の詩学　かな物語の生成と心的遠近法』、2007、723P
④阿部泰郎、名古屋大学出版会、名古屋大学比較人文学研究年報『城端別院善徳寺虫干法会調査報告書』、2007、128P
⑤阿部泰郎、西尾市岩瀬文庫、西尾市岩瀬文庫特別展示図録『絵ものがたりファンタジア』、2007、48P
⑥阿部泰郎、西尾市岩瀬文庫、西尾市岩瀬文庫特別展示図録『岩瀬文庫蔵　奈良絵本・絵巻解題図録』、2007、80P

〔その他〕
ホームページ等

１.図録
①塩村耕編『岩瀬文庫平成悉皆調査展Ⅷ　こんな本があった！』（展示図録）、2011、22P
②塩村耕編『岩瀬文庫平成悉皆調査展Ⅶ　こんな本があった！』（展示図録）、2010、22P
③塩村耕編『岩瀬文庫平成悉皆調査展Ⅵ　こんな本があった！』（展示図録）、2009、21P
④塩村耕編『岩瀬文庫平成悉皆調査展Ⅴ　こんな本があった！』（展示図録）、2008、26P

２.ＨＰ
①岩瀬文庫
http://www.city.nishio.aichi.jp/kaforuda/40iwase/
②名古屋大学附属図書館古典籍ＤＢ
http://libst1.nul.nagoya-u.ac.jp/wakan/index.html

３.関連論文等
①堀川貴司「日本古典籍の書誌学的アプローチ」、『情報知識学会誌』18(4)、344-351P、査読有、2008

６．研究組織
(1)研究代表者
塩村　耕（SHIOMURA　Koh）
名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：80178855

(2)研究分担者
高橋　亨（TAKAHASHI Toru）
名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：10093048

阿部　泰郎（ABE　YASURO）
名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：60193009

榊原千鶴（SAKAKIBARA　CHIZURU）
名古屋大学・男女共同参画室・助教
研究者番号：50313979